

まじかる☆ないと

## 第2部:魔王降臨編

### 第9章:魔王降臨

エレナはアイリーンの部屋を出るとそのまま宿を飛び出し、あてもなくシクサルの街を彷徨っていた。

エレナ:「何よ！魔女とあんなことしているなんて…」

??:「エレナ…」

暗闇の奥から男の音がする。

エレナ:「誰？」

??:「俺は魔王うじゃ。お前が一人になるときを待っていたぞ。」

魔王…魔女よりも格上の存在だ。今までその姿を見た者がいないと言われている。それが何故ここに？エレナは身構える。

エレナ:「魔王？いきなりあたしに会うなんて運が悪かったわね。ここでお前を倒せばすべて終わる！」

エレナは聖魔法“ホーリー”を詠唱し始める。

うじゃ:「聖魔法か。だが俺の姿が見えなければ、その強力な魔法も当てることはできまい。」

エレナ:「お前の気配は感じている！そこだ！」



エレナのホーリーが闇を切り裂く。

うジャ:「く…く…らったか…流石は最強の魔法使いと言われるだけのことはある。」

魔王はそう言うと、突然その気配が全くなり霧が出てきた。

エレナ:「何か仕掛けてくるわね…」

少しして男が歩いて来た。その先に女の子がいてスマホを操作している。

エレナ:「あの男が魔王?…女の子に何かするつもりかも…」

エレナは女の子と男の間に立ち、慎重に男の動向を観察する。異常な動きはない。女の子もその場でスマホを操作していたが、スマホをバッグにしまい、こちらに向かって歩き出してきた。そしてエレナを追い越そうとしたとき、

女の子:「ふふ…隙を見せたな。」

エレナ:「しまっ…」

女の子:「頂くぞ、お前のカラダ！」

女の子から幽体が抜け出る。それは魔王の輪郭となると、間を置かずエレナの頭の中に浸透していった…呪文を発動する余裕もなかった。エレナの中に入ってきたうジャはエレナのカラダを支配しようと駆け引きを仕掛けてくる。

うジャ:(お前の仲間のタカは魔女とエッチなことをして楽しんでたぞ。)

何故そのことを?あたしたちの動きは監視されている?

エレナ:(魔女の方から誘惑してきたんだわ!)

うジャ:(そうだとしてもタカは断ることができたはずだ…)

エレナ:(きっと何か脅されて仕方なく…)

うジャ:(魔女との戦いに勝ったお前たちが何故、何を脅されるというのだ…)

確かにその通りだ。あたしは言葉に詰まる。

エレナ:(それは…)

うジャ:(お前は何のために戦うのだ?)

エレナ:(あたしは王国を守るために…)

魔王の言葉に耳を貸してはダメだ!

うジャ:(もしそれが叶ったとして、お前のその後はどうなる?既にお前が密かに想うタカは魔女と結ばれているのかもしれないのだぞ。)

魔王は誰にも言ったことがないあたしの気持ちを見透かしている。誰にも言えなかったこの想いを…

## 第10章:決別の夜

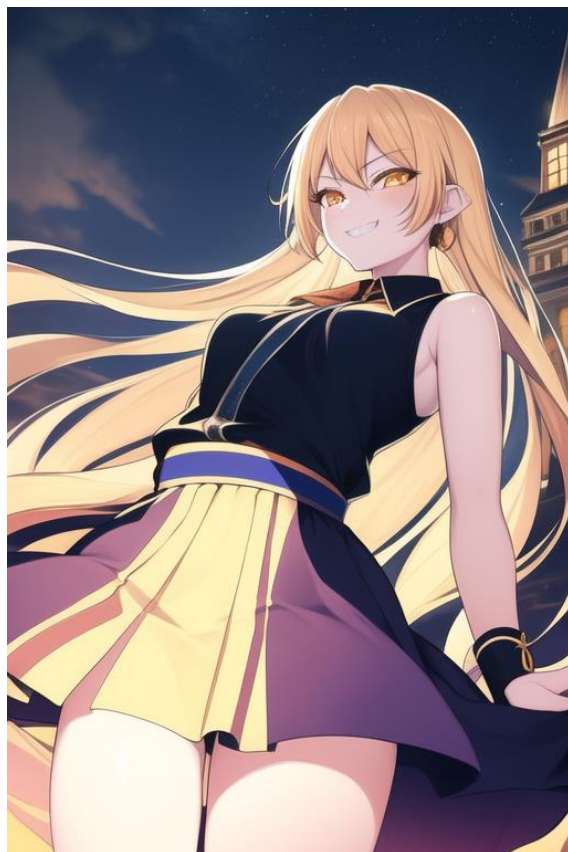
うジャ:(俺にカラダを明け渡せばタカを魔女から取り戻してやる!お前のカラダを使って。)

エレナ:(タカ…あたしは…あなたが欲しい。)

うジャ:(エレナ…お前も自分自身の願いを叶える権利がある。お前は俺と一つになるのだ!)

エレナ:「はい…魔王さま♥あたしのカラダを使ってあたしの願いを叶えてください…」

エレナの肉体を魔王の意思が支配する。エレナの美しく蒼い瞳が魔王と同じ金色に変わり、きらざらと輝き出していた。エレナは魔王うジャと1つになった。



うジャ in エレナ:「ふふ…ついにエレナのカラダを手に入れたぞ!これで俺の願いが叶う!」

そこには口元を歪め不敵に笑うエレナがいた。姿形はエレナだがその雰囲気は清廉な聖女の面影はなく、野心に満ちた魔王そのものとなっていた。

うジャ in エレナ:「カラダに溢れる無限の魔力…そして…」

エレナとなったうジャは自らの肉体をうっとり眺める。

うジャ in エレナ:「みずみずしいこの肌…全身から発せられる甘い香り…そしてカラダの奥底から湧き上がるこの想い…人間の女とはこうも素晴らしいのか!」

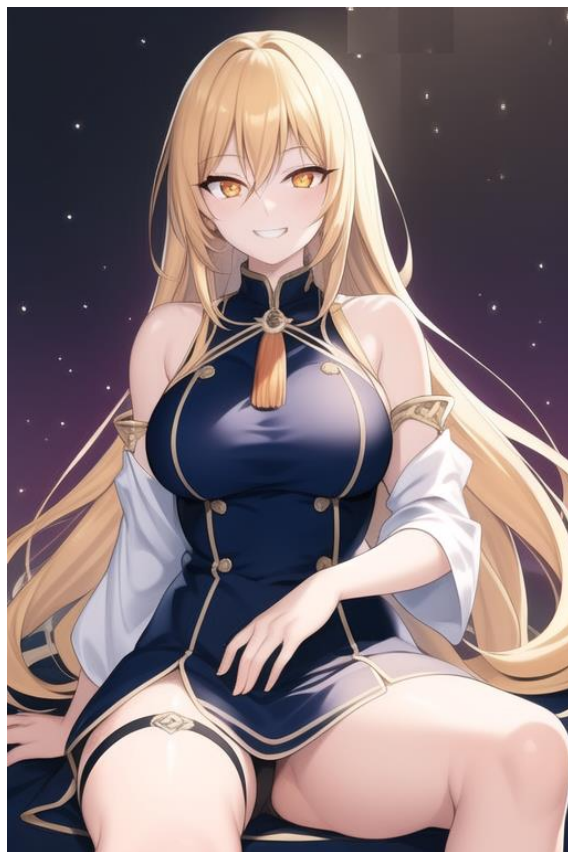
うジャは今は自分のものとなったエレナの肉体を絶賛する。

うジャ in エレナ:「エレナ…約束通りお前の願いも叶えてやる!生まれ変わったこの魔王うジャの手によってな!」

その頃、俺はそんなことも知らずアイリーンの部屋にいた。アイリーンの部屋のドアが勢いよく開く。部屋の外からエレナが入って来て、俺たちの前を横切り窓辺に立った。

うじゃ in エレナ:「ふふ…アイリーンのカラダに入っているのはタカだな？」

エレナは窓を開けると窓辺に足を広げて座った。聖魔法師団のローブ抜き襟で女性らしくを着こなしつつも俺たちを見下ろす姿は、背後に映る夜空とも重なり神々しく尊大に見えた。



タカ in アイリーン:「俺たちが入れ替わっているとわかってくれたのか…それなら…」

アイリーン in タカ:「待って！様子が変だわ！エレナじゃなくこれは…」

うじゃ in エレナ:「さすがだな、アイリーン。」

アイリーン in タカ:「この雰囲気…まさか？魔王さま？」

タカ in アイリーン:「魔王？魔王がエレナに憑依しているのか？」

うじゃ in エレナ:「そうだ。俺だ。うじゃだ。」

タカ in アイリーン:「そんな…魔王が相手だと言えどもエレナがそう簡単に隙を見せるとは思えない。」

うじゃ in エレナ:「エレナは自ら進んでこのカラダを俺に差し出したのだ。アイリーンよ…俺と共に来い！そうすればお前の望む人間の生気などいくらでも手に入れることができるだろう。それにこのカラダもお前を欲している。」

## 第 11 章：魔王の目的

エレナがそんなことをするはずがないと思いつつ、目の前の現実がそれを否定し、俺は愕然とした。ここでアイリーンまで去れば、俺は一人となってしまう…

アイリーン in タカ:「魔王さま…あたしはもうあなたと共に歩めない…」

俺はその言葉に胸を撫でおろす。

うじゃ in エレナ:「俺が男となったお前を満足させてやるのにな…このカラダは素晴らしい！このカラダがあれば俺の望みが叶う！」

アイリーン in タカ:「魔王さまの望みって…エレナになってあんなことや、こんなことを…」

タカ in アイリーン:「最低だな…お前…」

うじゃ in エレナ:(アイリーンと入れ替わって既にあんなことをやこんなことをやっているお前に言われたくはないがな…)

うじゃ in エレナ:「溢れる魔力に加えて更に成長の余地を残している。俺がこのカラダを使うことでエレナは更に強力な魔戦士として生まれ変わるのだ！」

タカ in アイリーン:「それほど強大な力を手に入れて何をしたいんだ？」

うじゃ in エレナ:「俺にはやらなければならないことがある。そのためにエレナのカラダが必要なのだ。俺の肉体は今使える状態ではない…」

アイリーン in タカ:「それでエレナのカラダに乗り移ったっていう訳ね…」

タカ in アイリーン:「お前の目的のためにエレナのカラダを自由に使わせる訳にはいかない！」

うじゃ in エレナ:「では俺を倒すことだな。俺を倒せばエレナのカラダからは出ていく。」

アイリーン in タカ:「本当ですね？」

うじゃ in エレナ:「男に二言はない。」

アイリーン&タカ:「説得力がまるでない…」

うじゃ in エレナ:「今のお前たちでは俺に勝てない。準備ができれば首都エトワールの南の古城ウルティマに来るのだ。」

うじゃ in エレナはそう言うと、テレポの転移魔法によって姿を消した。

アイリーン in タカ:「エレナが魔王さまに憑依されてしまうなんて…ねえ、タカ。魔王さまの言う通り今のままでは勝てない。元のカラダに戻った方がいいんじゃない…」

タカ in アイリーン:「アイリーンは元のカラダに戻ればうじゃに勝てそうか？」

アイリーン in タカ:「いえ…到底及ばないわ…しかも今はエレナのカラダに乗り移っているし…」

タカ in アイリーン:「それなら、俺がうじゃに勝つのは不可能だ…それに俺はアイリーンが魔王の誘いを断り、俺を選んでくれたことが嬉しかった。俺はアイリーンのことをもっと知りたい。」

もう少しアイリーンのカラダでいさせてくれないか？」

アイリーン in タカ:「嬉しいんだけど…本当にそれでいいの？」

タカ in アイリーン:「ああ、男に二言はない(笑)」

アイリーン in タカ:「今は女性だけどね(笑)共に成長して魔王さまを倒しましょ♥♥」

## 第12章:再出発の朝

俺はアイリーンと同じベッドで一夜を明かすことにした。ベッドに横になって休むとカラダのあちこちに痛みを感じる。アイリーン、やっぱり我慢していたんだな。俺は何か優しいものに包まれた。アイリーンなのか…俺の痛みが和らぐ。俺はほどなく安心して眠りに落ちた…

翌朝、俺は着替えて部屋のテラスに出た。そこへアイリーンも部屋から出てきた。

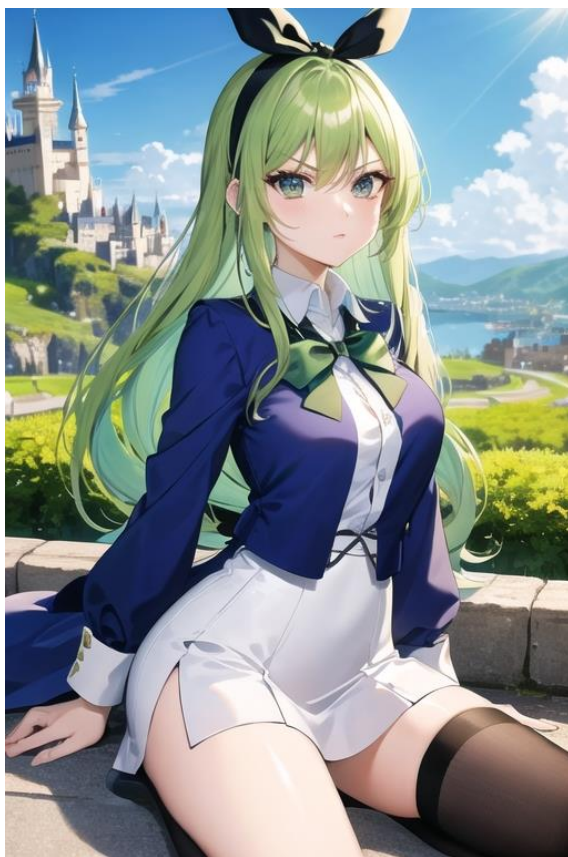
アイリーン in タカ:「おはよう、タカ。よく眠れた？」

タカ in アイリーン:「ああ、アイリーンは？」

アイリーン in タカ:「あたしもよ。こんなに目覚めがいい朝は初めてだよ♥♥ あ、タカ、その服…」

タカ in アイリーン:「…昨夜、アイリーンと出逢ったときの衣装だといかにも魔女って感じだったから…ってことでエレナの服を借りてみたんだが…どう、かな？」

俺はテラスの椅子に腰掛けアイリーンに俺の着こなしを見てもらった。



アイリーン in タカ:「いいじゃない♥️あたしもエレナの服を着れば清楚な感じになるのね。ちょっとお胸がきつそうだけど…」

俺の姿のアイリーンは口に手を当て、勝ち誇ったような表情をしている。

タカ in アイリーン:「ああ…胸は少し苦しいけど、女性はこんなものかと思っていた…」

アイリーン in タカ:「服はもう少しゆったりとしたサイズのを選んだ方が良いわね…でも…その胸とおしりを強調した座り方…女性そのものよ♥️」

意識してそういう座り方をした訳ではなく自然とそうになっていたため、俺は恥ずかしさで言葉が出なかった。

アイリーン in タカ:「タカは女性の素質あるのかも(笑)あとは笑顔、かしら…」

タカ in アイリーン:「アイリーンは笑顔だね。俺のカラダになって不安とかないのか？」

アイリーン in タカ:「ない、と言ったら嘘になるけど…」

アイリーンは俺のせいで入れ替わってしまった。男になりたいとは思っていなかったはずだ。俺はアイリーンのためにと思ってこのカラダに留まっている。でもアイリーンは元のこのカラダに戻りたいと思っているんじゃないだろうか…

アイリーン in タカ:「大丈夫だよ、タカ。あなたのカラダにいたいっていうのはあたしの本心…」

タカ in アイリーン:「アイリーン、俺は絶対に君を守る！」

アイリーン in タカ:「ありがとう、タカ。でもあたしも守られるだけでなく、あなたを守りたいの…一緒に強くなりましょ♥️」

アイリーンは俺を背中から抱きしめる。ああ…この感じは何だろう…俺は自然と微笑んでいたが、アイリーンからは俺の表情を見ることはできなかった。

### 第13章: 峠の再会

俺たちはこの国の始まりの地と言われているイニシオ高原に出て修行をすることとした。道中の峠に差し掛かると王国騎士団に遭遇した。先頭には仲間のトムとジェリーがいる。

トム:「おい、あれは魔女アイリーンじゃないか？」

ジェリー:「隣にいるのは…タカ？魔女を倒しに行つてその後連絡が取れなくなっていると聞いたが…」

トム:「何故魔女と仲良く歩いているんだ？」

タカ in アイリーン:「トムとジェリー、騎士団で仲良くしていた奴らだ。この状況をどう説明したらよいものか…」

アイリーン in タカ:「ここはあたしに任せて！」

アイリーンは俺としてトムとジェリーのもとへ話をつけに行った。俺もアイリーンに続く。

アイリーン in タカ:「アイリーンは、あたしが、いえ…俺が説得してもう人を襲わないの！」

ジェリー:「そんな簡単に改心するのか？タカ、騙されているじゃ…」

アイリーン in タカ:「良く考えてみて！彼女が人を襲うのなら何故あなたたちを見て何もしないの？彼女の力ならば一瞬であなたたちを倒せるはずよ。」

タカ in アイリーン:「ああ、俺は…あたしはもう人間を襲わない…わ。今までごめんなさい…」



アイリーン in タカ:「俺はアイリーンを監視するためにしばらく騎士団を離れる。陛下にもそのように伝えてくれ。」

アイリーンの迫真の演技によりトムとジェリーたちは半信半疑のままその場を去って行った。

タカ in アイリーン:「良かった…てっきりバトルになるかと…」

アイリーン in タカ:「そうね…以前のあたしなら軽くあしらっていたところだけど、タカがあたしたち魔女と仲良くしようとしているから…あたしも頑張らないとって思って…」

タカ in アイリーン:「俺のアイリーンの真似はどうだった？」

俺は誇らしげにアイリーンに尋ねた。

アイリーン in タカ:「う～ん…そこはもうちょっと努力が必要かしら(笑)」



タカ in アイリーン:「え？どこが？」

アイリーン in タカ:「表情とか、言葉遣いとか、仕草とか、全部だよ(笑)」

タカ in アイリーン:「そうか…もう少し練習しないとか…」

アイリーン in タカ:「十分だよ。その気持ちだけで。あなたはありのままできて欲しいから…」

「それよりも…修行を頑張りましょ。」

タカ in アイリーン:「そうだな！アイリーン、俺に魔法の基礎を教えてくれ！」

アイリーン in タカ:「うふっ♥いいわよ。あなたもあたしに剣を教えてねっ♥」

俺たちはイニシオ高原を目指して再び歩き続けた。

#### 第14章:金のたまご

イニシオ高原はその昔、観光地として多くの者が訪れていたが、今はシクサルの衰退と共に住む者はもちろん訪れる者もほとんどいなくなっていた。俺はアイリーンから魔法を教えてもらった。あの強大な魔力を持つ魔女アイリーンの肉体だ。こつさえつかめば初級魔法くらい、すぐに…と思っていたが甘かった。サンダーさえも魔力を集約できず発動できなかった。一方のアイリーンも内股で剣が大振りとなり、かつてこの国一の聖騎士と言われた面影はなかった。

タカ in アイリーン:「君のカラダになればすぐにできるって思ったんだけど意外と難しいな…」

アイリーン in タカ:「あたしもあなたの強靱な肉体があればあなたのように動けると思ったけど、なかなか感覚がつかめなかったわ…」

突然、俺たちの感覚が変化する。

タカ:「あれ？俺？」

アイリーン:「憑依の魔法が時間切れみたいね。あたしもこうして入れ替わりとして憑依の魔法を応用したことがなかったけど、どちらかの愛液が相手の肉体で消費されたらこうなるみたい。」

タカ:「アイリーン、俺たちこのまま修行した方が強くなるんじゃないだろうか？」

アイリーン:「そうね。強くはなると思うけど、伸びしろは少なく限界はあるかもしれない…あたしもあなたも自分のスタイルとして完成形に近いみたいだね。でも入れ替わって相手の肉体の潜在能力を引き出せば飛躍的に強くなって魔王さまと渡り合える力を手にすることができるかもしれない。ねえ、まだ初日、もう少しカラダを交換して頑張ってみない？…タカがあたしのカラダ、嫌じゃなければだけ…」

いじらしい上目づかいで俺を見るアイリーン。

タカ:「そうだな！上手くできなくて弱気になっていた！俺がアイリーンの新たな力を引き出さよ！またカラダを交換しよう！君も嫌じゃなかったら俺のカラダを使ってくれ。」

アイリーン:「もちろん！…でもあなたの前であれを自分でやるのは恥ずかしいから、お願いできないかしら…あたしもあなたのお手伝いをするから…」

アイリーンは俺を見上げ、その逞しい腕に手を添える。俺もアイリーンの腰に手を回し優しく抱きしめる。俺たちは何も言わずに唇を重ねる。

タカ:(戦いなど忘れてこのままずっと…)



俺はアイリーンの股間に服の上から手を触れるとしっとり湿っていた。

タカ:「！ごめん、アイリーン。お前のカラダでかなり汗をかいてしまったようだ。」

アイリーン:「大丈夫…あたしも同じだから…」

## 第15章:肉体再交換

アイリーンは先ほどまで自分のものだった俺の股間に同じように服の上から手を触れた。俺も同じような状態だった。これは俺のカウパー液…俺はアイリーンのショーツに手を伸ばし、その中に手を忍ばせる。昨夜、俺としてアイリーンのその割れ目に挿入してからは、トイレ以外でそこには触れて来なかった。アイリーンも同じように俺のボクサーパンツに手を入れる。お互いにその中にあるモノに同時に触れると思わず声が出る。

アイリーン:「んっ♡」

タカ:「はっ…」

その声で更に興奮が高鳴り、俺はアイリーンの割れ目に、アイリーンは俺の肉棒を掴む。

アイリーン:「さっきまであたしのだったモノ♡」

タカ:「ああ、そしてまた、アイリーンのモノになるんだ。」

その言葉にアイリーンのしなやかな手が更に強く俺の肉棒を握り、ゆっくりと動かし続ける。

アイリーン:「あたしの…おちん○ん♡」

俺も呼応するようにアイリーンの割れ目に指を入れ、ゆっくりと動かし続ける。このカラダが今から俺のモノになるんだ。俺は本来の目的である「アイリーンのカラダで強くなること」以上にその肉体の魅力に惹かれていた。俺はもう一度アイリーンになれる…

タカ:「アイリーン、俺に身を委ねてくれ…」

アイリーン:「タカ、あなたもあたしに委ねて…」

アイリーンの割れ目にある俺の指はねっとり、入れ替わるのに十分な量となって絡みついている。俺の精液もアイリーンの指に十分なほどとなっているようだ。

アイリーン:「うふっ♡タカ、あなたのカラダで逝かせて♡」

アイリーンは俺の口の中にその指を入れる。俺の口はそれを受け入れる。

タカ:「んあ…」

俺もアイリーンの口の中に俺の指を入れる。アイリーンは俺の指を舐め、艶めかしく言った。

アイリーン:「タカ、あなたのカラダ、あたしがもらうねっ♡代わりにあたしのカラダをあげる♡」

タカ:「う…あ…」

アイリーンの指が俺の口の中にあり上手く話せないが、俺は大きく頷いた。俺とアイリーンは共にもたれかかるように意識を失った。

どれくらい意識を失っていたのだろうか。俺たちはほぼ同時に目を覚ましたようだ。俺はアイリーンのカラダに戻って来た！目の前には俺の肉体があり、その目は緑色の輝きを放っている。アイリーンも無事俺のカラダに乗り移れたようで俺はほっとした。俺たちは顔を見合わせて微笑んだ。

と、そのとき気配がして俺たちは振り返った。

うジャ in エレナ:「なかなか苦戦しているようだな。」

タカ in アイリーン:「エレナ！いや、うジャか！何しに来た？」

## 第16章:魔王再来

うジャ in エレナ:「ダークネス！」

その言葉には答えず清廉なエレナの肉体から禍々しい魔法が錬成され俺たちに向けて放たれる。うジャ in エレナは黒魔法を駆使し容赦なく俺たちを攻撃してくる。うジャ in エレナの攻撃が俺の右腕にヒットする。

タカ in アイリーン:「うあ！」

アイリーン in タカ:「タカ！休んでいて！…魔王さま、あたしが相手になるわ！」



うジャ in エレナ:「もう少し楽しめると思ったんだが…この程度とは…残念だよ！今の俺とお前たちとの実力の差を見せてやろう！」

タカ in アイリーン:「俺も戦う…」

アイリーン in タカ:「ダメよ！無理しないで！」

タカ in アイリーン:(そうだった。無理をすれば、アイリーンのカラダを傷つけてしまう。)

うジャ in エレナ:「アイリーンよ、俺の魔力に及ばなかったお前が慣れないそのカラダに入って、本当に俺と戦えると思っているのか？」

アイリーン in タカ:「たとえ敵わないとしても黙って見ている女だと思って？」

うジャ in エレナはアイリーンとの戦いで見せたように胸の前で魔力を集中させている。

アイリーン in タカ:「まさかアルテマを使うの？まずいわ…準備時間は長いからあたし一人な

ら何とか紙一重で交わすことができるかもしれないけど、タカを守ることはできない…」

うジャ in エレナ:「もしかして詠唱まで時間が掛かると思っているか？そんな弱点は俺がエレナに乗り移ったことで克服している！ここで耐えられないようなら、お前たちが俺に挑む権利はない！さあ、いくぞ！アルテマっ！」

強力な光の玉が俺たちを襲う！

タカ in アイリーン:「せめてアイリーンだけは…」

アイリーン in タカ:「何とかタカだけは…」

俺たちの想いがシンクロする。俺たちは目を合わせ、これから起こす行動を言葉でなく魂で共有した。俺の手から魔法が放たれ、アイリーンの持つエクスカリバーに宿る。と同時にアイリーンのカラダが輝く。俺はアイリーンに魔力を送り続けた。アイリーンはそれを全身で受け取ると、緑色に輝くエクスカリバーでアルテマの軌道を変え回避したのだ。

うジャ in エレナ:「ほう…連携技でぎりぎり回避したか。よかろう。お前たちの力を認めて今日は引いてやろう…」

うジャ in エレナはそう言うと、テレポの魔法によりこの場を去った。

タカ in アイリーン:「アイリーン、俺、もっと強くなりたい…」

アイリーン in タカ:「そうね…独力では限界があるかも…！ねえ…あたしの魔女の里に行って修行してみない？あたしの師匠ならきっと力になってくれるはず！」

タカ in アイリーン:「わかった、アイリーンの里に案内してくれ。今日は宿に戻ってゆっくり休んで明日出発しよう！」

---

魔女とカラダが入れ替わったことで、魔女との共生の可能性を見出したタカでしたが、直後にエレナに誤解されてしまいます。そしてエレナの心の間隙について、魔王うジャがエレナに憑依してしまう…なかなか上手く行かないものですね…

女性の皆さんは、魔王に肉体を奪われないよう気を付けてくださいねっ。男性の皆さんは、魔女に肉体を交換されないように警戒しましょう(笑)

さて、タカよりも強いアイリーンの更に上を行く魔王うジャ…2人は元のカラダで強くなるよりも、カラダを入れ替えて互いの潜在能力を引き出そうとします。入れ替わった直後は格段に戦力は落ちますが、惹かれ合う2人であれば、逆境を乗り越えられるのかもしれませんが。

ハロウィンが近づいてきました。第3部は魔女をメインとしたお話となり、そこで本格的な修行が始まります。そしてここでは…新たな出会いがあり、2人の決意を強く固める運命が待ち受けているようです。